

新しき村

7月号

2023年 Atarashiki-Mura
(since 1918年)



特集

武者小路実篤「天命」

武者小路実篤「勇気を燃やす言葉」

新しき村創立から第24年・1941年（昭和16年）

旧武者小路実篤邸「仙川の家」・夏休み企画展

新しき村 七月号 目次

巻頭 新しき村のフォトギャラリー

4

天命	武者小路実篤	12
勇気を燃やす言葉	武者小路実篤	16
ご挨拶	理事長 武者小路知行	19
新しき村を公益法人とする手続(七)	副理事長 千賀修一	20
最近の新しき村	専務理事 加藤 勉	27
『もう一息、もう一息』と、さらに高めていきたい		28
蛍の観賞会	村外会員 水谷 淳	29
評議員就任のご挨拶	評議員 長島 光夫	30
埼玉新しき村創立から 第二十四年 一九四一年(昭和十六年)		31
◆ 調布市武者小路実篤記念館		
旧武者小路実篤邸「仙川の家」		41





夏休み企画「おしえて！武者小路実篤」…………… 47

秋季展「新しき村創設一〇五年―理想社会実践の歩み―」…………… 49

仕事の喜び…………… 武者小路実篤 52

実篤人生詩集 この道より…………… 武者小路実篤 54

向山昇兄を悼む…………… 中村隆夫 55

令和五年度事業計画（令和五年五月一日～令和六年四月三〇日）…………… 57

会員だより…………… 61

編集室・原稿募集…………… 65

新しき村の会員募集・新しき村の地図…………… 66

新しき村の精神…………… 67

題字・絵 武者小路実篤

三月

新しき村のフォトギャラリー



3月19日評議員会兼会員大会



ハクモクレン



ソメイヨシノ



コブシ



レンギョウ



スイセン



ミツバツツジ



シヨカツサイ



スプリング・スノーフレーク



ユキヤナギ



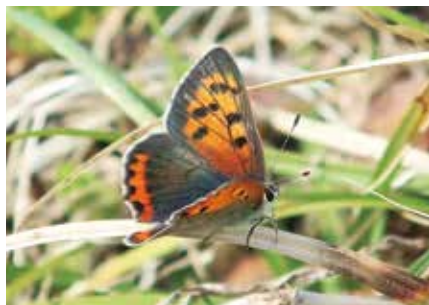
サギゴケ



ツクシ



採取したバケツ一杯のツクシ



ベニシジミ



ツグミ



大愛堂前の田んぼのニホンアカガエル（埼玉県の絶滅危惧Ⅱ類）



お茶畑の剪定



ジャガイモの土寄せ



4月2日花の日 大愛堂(納骨堂)の納骨者の供養を行う(参加者22名)



4月2日評議員会兼会員大会



掘ったたけのこたち



たけのこを掘っている



アサヒナカワトンボ



田んぼのカルガモ



ナガメカメムシ



サツキ



ツツジ



イモカタバミ



たんぽぽ



牡丹

新しき村の年間集会

一月 第三日曜、新年会

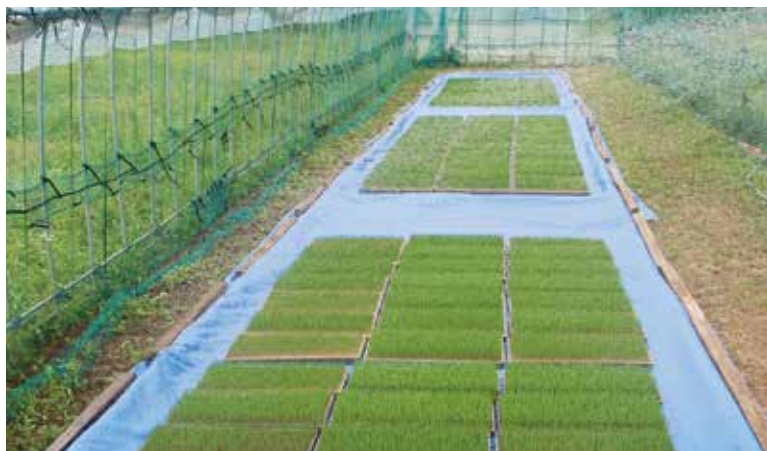
四月 花の会(第一日曜日)

四月 第一日曜、評議員会兼会員大会
(次年度事業計画、予算承認他)

七月 第四日曜、評議員会兼会員大会
(事業報告・決算書類の承認他)

八月 労働祭(第二日曜日を最終とする一週間)

九月 第三日曜、埼玉での「新しき村」創立記念祭



ハウスの苗



苗床の準備



さつまいもプロジェクトを始動



収穫したうめの実



うめと容器



うめシロップ



茶摘み



お茶の選別



ガビチョウ



コチドリ



キジ



イチジクの実



ビワの実



田植え



さつまいも畑



じゃがいも収穫



ハバヒロトンボ (県の準絶滅危惧種)



ミスジチョウ (県の準絶滅危惧種)



ミナミメダカ (環境省の絶滅危惧Ⅱ類)

天命

武者小路実篤



仙川例会（昭和50年代）

天命という言葉の本当の意味を自分が知っているとはいいきれない。しかし僕流に考えてこの言葉は僕には実にぴったりしたいい言葉と思える。僕は天命のままに生きたい人間の一人であり、又そう生かしてもらえば満足できると思う者である。しかし実際は天命を生かすことができる人は殆どないのが事実である。其処が当人にとっても、はたの人にも心残りになるのだと思っている。

第一、人間は天命通りに生れたと言い切れないものだと思うが、しかし天命なしには又生れることができなかつたのも事実と思う。人間は人意だけで生れることはできないものだ。殊に自分の意志だけでは生れることができないものだ。だが親の意志で生れたわけでもない。親の中で無意識に生れたがったのは結局自分だと思うが、それはもう人智の及ぶ

境地ではない。理由はどうかあろうと、生れた時は既に自己である。どんな理由があろうと人間に生れた事実は否定できない。天命というのは大げさであることが事実だろうが、自分にとっては天命である思っているのだと思う。どうしても生れた事実は否定できず、あともどりはできない。死ぬまでは生きる運命を事実持たされ、健康になるのが何よりの一個の人間になったのだ。その宿命を立派に生かすか、生かさないかは、当人の運命にもよるが、できるだけよく生かしたく思うのが自然だ。そしてそれを完全に生かすことができたら人を、僕は天命を完うした人と思うのだ。天命を完うした人は古今東西、果たして何人いるか、一人もないか、僕にはわからない。しかし正直に自己を生かしたいという人は、天命を完うしたいと思うように内心の要求ができていくことは事実と思う。しかしその内心の要求を忠実に生かすには、いろいろ邪魔が入るのも事実である。僕はその邪魔や、誘惑に就いてここに一々書きたいとは思わない。いろいろの邪魔が入るが、しかし内心の要求は天命を生かすことを望んでいることは、最も深い真実だと思っている。この地上に生かされるだけ生きて、自分の生命をできるだけ真実に生かしたい。これが人間の正しい要求で、その要求によって自己を正直に、本気に生かした人を僕達は尊敬し、又熱愛するのは事実である。

この熱愛を忘れたものは、もう人間性を失なった人で、慾望と野心と快楽に我が身を売り、他人の不幸には無関心になる。人間性を失なった病的人間である。こういう人にとつ

ては天命は問題ではなくなる。そういう人には真理も、美も、正義も、愛も零にひとしくなり、もう出鱈目である。完全に出鱈目になった人は存外少ないのが事実と思うが、人間の生きてゆく目的からはみ出し、天命とは縁もゆかりもない人間になり、死以上のものは零になる。

僕はそういう人間は病的人間で、健全な人間とはいえない、人生から脱落した人間で、人生を共に語ることでできない人と思う。

天命から脱落した人であり、人類の行進の落伍者である。落伍者は仕方がない。人類の理想に向っての遠い行進の理想は、すべての人が天命を完うする事にあるとだということ。僕は益々信じるようになった。

自分の天命を完うすることは、他人の天命を完うすることに役立つようになってきている所に、僕は人生の妙味があるのだと思っている。

昔は、人類は生きぬく為には戦うことが必要だった。強いものは弱いものを征服し、奴隷にするのが現実で、誰もが勝利者の残酷を悪事とは認めず、勝利者というものを尊敬し、その奴隷になることを現実的事実と認めていた。その時分は勇士がすべての人から尊敬もされ信頼もされていた。敵軍を多く殺したものは勇者として尊敬もされ、信頼もされた。だがそういう野蛮時代はやつと去りつつある。まだ完全に野蛮時代はすぎ去らないが、すぎ去りつつあることは事実だ。

る。そこが人生の面白いところでもあり、救いでもある。死ねば、それで我らの務めは果たしたことになる。死ぬまでは、働かなければならないのが人生である。

一番幸福な人

何かうまい話はないかという考え、楽をして金があるかる事はないかと考える人は、人生が真面目なものという事をつい忘れている人だと思う。真面目に働く事そのことに、喜びを見出せる人で始めて人生の妙味はわかるのだと、僕はますます考えるようになってき



ている。

毎日毎日あまり金にもならない仕事をこつこつして、そこに喜びと生き甲斐を感じ、充実した気持ちで生きている人は一番大地に足をつけて歩いている尊敬すべき人びとだと僕には思われるのだ。金で換算できない生活だと僕には思われる。金に走った生活は本当の生活ではない。そう云う生活が本当の人生だと思ったら、人生は実に味のないものになると思う。僕達も金のいる仕事を随分している。そのためには金をとらなければならぬのは事実だが、金の事をすっかり忘れてできる仕事、一番自分にびったりして、働く事その事が愉快になる。また自分の義務を果たしたような気になれ愉快になる。

多くの人が毎日真面目に働いているので、その社会は健全に進歩するのは当然で、新聞や、下手な文学にあらわれている、快樂ばかりを追っているような生活をしていたら、その人は齢とってから必ず悔いを残すであろう。

第一、それではだんだん生活ができなくなるであろう。

僕は、人生真面目に働くところと思ってちよいどいので、人生を遊ぶところのように考えているのはまちがいだと思っている。そして毎日無事に自分の仕事をこつこつやることができれば、その人は一番幸福な人と思っている。

気にする事を気にしない修業

人間はいろいろの理由で、病気がさけられない時があるのも事実だが、しかし人間自体そのものは丈夫になりたがり、また丈夫になるようできていると僕はこの頃ますます思っているのだ。どうも病

気はよくない。精神力のうんと強い人の

事は知らない。たいがいの人は病気はすばらしい事だとは云えない。本当に健康な時は僕は人生はすばらしいと考える方が本当だと思っているが、気にかかることがまるでない人が、この世にいれば、その人は人生はすばらしいと、感じる方が本当には思える。しかし雲の全くない日は少ないように、気にかかる事が全くない時も少ない。ただ僕は気にしても仕方がない事は気にしないようにしている。だから他の人だったら気にする事を気にしない修業はしてきた。例えば自分の大事にしているものがなくなっても、僕はわりにあきらめがいい、人にだまされても、僕は別に腹も立たない。などなど、それも程度で、あまり威張るわけにはゆかないが、ともかく気にかかるには、自分の事に没頭しすぎる時が多い。そして自分の仕事に没頭できる時、別に意識もしないが、人生がすばらしいという感じはうける。何しろ一生懸命に仕事ができる事は喜びだ。

(青春出版社「勇気を燃やす言葉」武者小路実篤)



ご挨拶



理事長 武者小路 知行

現在当法人は、埼玉県に対し昨年五月一般財団法人から公益法人化へ向けて申請し手続きが進められています。

令和五年一月埼玉県から、農業委員会の許可を得ないで太陽光パネルが設置されている他農地法に抵触することがあるので解消してもらいたいと指導を受けました。

県から話を聞き、理事会を開催し撤去工事の見積りを取ったうえ、撤去工事を発注することを決議しました。この決議に基づき農地法に抵触する太陽光パネルその他の建物を撤去し、私道の農地部分の舗装を撤去する工事を発注し、七月上旬に撤去工事は完了しました。これらの工事をした結果農地法の問題違反はな

なり、今後公益認定手続きは進むと思っております。機関誌「新しき村」は、これまで年六回発行しており本来であれば本年五月に発行することになっていました。

本年一月号（七二頁）と三月号（八二頁）は、オールカラー化して頁数を増やして発行し、七二頁〜八二頁くらいの頁数で発行を継続するためには、掲載原稿を集め編集する時間と経費の関係から年六回発行することは困難であるので、四月二日開催の評議員会で、本年五月以降「新しき村」の発行を年四回（二月・四月・七月・一〇月）とすることが決議されました。

年四回の発行になりましたが、今後も村の機関誌として村の状況、方針、歴史を通して村内外に村の現状を知ってもらうこと、村の同人誌として会員諸兄弟の作品の発表の場として「新しき村」を継続して発行していく所存ですのでご協力ください。



太陽光パネル撤去工事

新しき村を公益法人と する手続（七）



副理事長 千賀 修一

一 太陽光パネルの撤去

本年一月一日埼玉県の担当者から、当法人が太陽光パネルを設置している土地の一部に農地（畑）がある。農地に太陽光パネルを設置する場合、農業委員会に届出て太陽光パネル設置の許可が必要であるところ、この届出がしていないと農地法違反となるので、公益認定申請の審査を進めるうえで農地法違反の有無について確認する必要があるので農林部と話し合ってもらいたいとのメールが来ました。

そこで、県の農林部に連絡をとり、川越市にある埼玉県川越農林振興センターで打合せすることになり、一月二四日武者小路理事長と倉敷理事の三名で行き埼玉

玉県農政課担当者二名・川越農林振興センターの農地担当者二名の方と打合せをしました。このとき県の担当者から、農地に設置されている太陽光パネルが何基あるかを調査し、そのパネルを継続して使用するときは、農地法の許可申請を出してもらいたい。許可申請が出されたとき、結論が出るまでに時間がかかり、許可されない可能性が高いともいわれました。また、公益法人認定手続を進めるためには、農地法違反を解消する必要があります、手続きを早期に進めるためには、農地に設置されている太陽光パネルを撤去することが早いと言われました。そこで、一月二九日理事会を開催し農地に設置されている太陽光パネルを撤去すると及び二月一日理事会を開催し、農地に設置されている太陽光パネルが八基（全体一九基）あることを確認し、八基の撤去の見積りを取ったうえ、撤去工事を発注することを決議しました。

二 撤去工事に着手

理事会の決議に基づき三月下旬に太陽光パネル撤去工事を発注し、四月末日までに撤去工事を完了しまし



撤去した 太陽光パネルの位置図



① 4月下旬太陽光パネル撤去工事着手・基礎のみが残っている



① 太陽光パネル撤去ほぼ終了



②③ 太陽光パネル撤去中

た。
 撤去したパネルは、位置図
 ①～⑧のパネル八基です。①
 ⑧パネルの撤去工事の経過
 を会員に知ってもらうため全
 て掲載します。



②③ 太陽光パネル撤去中



②③ 太陽光パネル撤去ほぼ終了



④ 太陽光パネル撤去基礎のみ



④ 太陽光パネルの撤去完了



⑦ 太陽光パネル基礎のみ



⑤ 太陽光パネル撤去中



⑤ ⑥ ⑦ 太陽光パネル撤去覆土後



⑤ ⑥ 太陽光パネル撤去中基礎のみ



5月19日工事完了後の調査



⑧ 太陽光パネル撤去中基礎のみ



5月19日工事完了後の調査

三 埼玉県の調査

太陽光パネル撤去後五月一日、埼玉県農政課、毛呂山町、坂戸市の方の立会を得て現地を調査してもらいました。

このとき、農地上に設置されたパネル八基の解体撤去が完了し、パネルが設置してあった土地が農地に復元されていること



6月10日追加パネル撤去工事



5月19日工事完了後の調査

を確認しても
らいました。

その際、坂
戸市の方か
ら、撤去した

八基以外にも
う一基の太陽

光パネルが農
地上に設置さ

れていると思
われると指摘

されました。

そこでこの
パネルについ

ても一部に農
地上に設置さ

れていること
が判明したの

で撤去するこ
とにし、六月

八日から撤去を開
始し、六月一五日

に撤去工事が完了
しました。

四 その後埼玉県

からの通知

六月一九日埼玉

県から、毛呂山町
の農地の一部に物

置が設置されてい
るので撤去の必要

があること及び、
農地を道路として

利用する部分ニヶ
所については、農

地転用申請又は道
路アスファルトを

剥がす等を検討し
てもらいたいと連



左側上の□は、太陽光パネルが設置されていた土地に面する私道。下の□は、八高線から入ってきた公道に直結する私道である。



□の建物が農地に建築されている倉庫。

絡がありました。

この点につ

いて村の理事
会で検討し、
倉庫について
は解体撤去す
ることにしま
した。

農地上にあ
る倉庫の横に
現在使用され
ていない旧牛
舎他の建物が
あり、これら
の建物は老朽
化しているの
で村の環境整
備のうえか
ら、県から要

請がある以前に解体する予定で既に解体工事を発注してあったので六月下旬に解体着工し七月一日までに完了しました。

また、道路のうち公道に連結する道路は、昭和二八年当時に、道路として造られ、以来村民の生活道路として重要な役割を担って来ており、村外の多くの人も使っている道路であるので、現状のまま道路として認めてもらうこととしました。

もう一本の道路は、太陽光パネルが設置されていた土地に面する私道で、村民が生活道路として使用しているが、一般の人が利用していませんので、この道路については、舗走面を撤去し、農地としての機能を復元することとしました。

倉庫の解体と前記私道の復元工事が七月一日までに完了し、埼玉県に報告しました。

この報告をした後、七月二〇日埼玉県から四名、坂戸市から二名、毛呂山町から二名の方が農村に來られ、農地法違反に関する調査をされました。当法人からは、武者小路理事長、加藤専務理事、倉敷専務理事の三名が立会って説明をしました。



倉庫解体工事中



7月倉庫・旧牛舎解体工事完了。左奥は公会堂。老朽化した建物の解体工事により村の環境は整備されました。



7月太陽光パネルが設置されていた土地の前面にある私道の舗装を撤去し農地に復元

この調査の結果、農地法違反についての問題が解決されたことが確認されました。これにより今後公益認定手続が進み、できれば本年九月一八日に開催される

村の創業記念祭の日までに公益認定が下りることを期待しています。

最近の新しき村



専務理事 加藤 勉

村では公益法人への移行を見据えて、新たな事業や施設の整備に着手しています。今回はその中から幾つかの事業をご紹介します。

まずはソフト面ですが、本年四月には実篤美術館内に事務所を新設し、併せて職員を配置し運営体制を整えました。

事業面では、秋の「さつま芋掘り体験」の計画にあわせて、四月下旬にさつま芋の苗を二五〇本、かぼちゃの苗を三〇本定植し、併せて落花生の種を蒔きました。収穫祭には地域の子どもたちをお招きし、農業の楽しさ、自然農法で育てたさつま芋の美味しさを味わっていただく予定です。

そして六月には「葛川のホタル観賞」と題して四日間にあわたって源氏ホタルの観賞会を実施しました。残念ながら四日のうち一日は雨で中止となりましたが、他の三日間は数多くのホタルを見ることができ、子ども達も大喜びの三日間でした。来年は更に工夫を凝らして、村の自然の豊かさを一層感じ取っていただきたいと考えています。

次にハード面をご紹介します。村の長年の懸案事項でありました旧牛舎の撤去ですが、七月中旬に解体工事が無事終了し、約四千坪の広い空間が誕生しました。村の食堂を兼ねた公会堂や実篤美術館に隣接している村の中心部に位置していますので、今後関係者の意見を聞きながら実篤の理想郷に相応しい空間として整備を進めていく予定です。

また、実篤美術館の入口にある四阿あずまやも綺麗に化粧直しが済み、来村者や散歩の方々に気持ちよくご利用いただいています。今後は、生活館内に図書コーナーを新設するとともに、古くなったトイレや八角井戸の改修などを計画していきます。

今、新しき村は大きな動きを示しています。地元毛呂山町民や坂戸市民をはじめ、広くは埼玉県民、そして全国の人々に新しき村を身近に感じ取っていただくため、村民をはじめ関係者が一丸となって『新しき村』づくりに取り組んでいます。どうぞ今後の新しき村にご期待ください。そして引き続きご支援を賜りますようお願い申し上げます。

オール一本勝ちVの阿部詩 進化を支えた「詩」とは

『もう一息、もう一息』と、 さらに高めていきたい

女子五二キロ級は東京五輪女王の阿部詩（二二）
パーク24^{II}が庄巻の五試合オール一本勝ちで制し、二
年連続四度目の優勝を果たした。六月にも最速でパリ
五輪代表に決まる見通しのヒロインを支える言葉と
は。担当記者がエピソードを明かした。



東京五輪女王の阿部詩

今年三月十五日、詩は
四年間通った日体大の卒
業式で自身が考えたあい
さつを読み上げた。文豪
の武者小路実篤の詩「も
う一息」を引用し、「次
の目標はパリ五輪での二
連覇。『もう一息、もう
一息』と、さらに高めて

いきたい」と決意を込めた。

この詩は、阿部兄妹が受け身から柔道を始めた兵庫
少年こだま会の道場に貼られていた。毎回の練習前、
当番制で誰かが朗読したという。旧兵庫警察署内の時
代から飾られていたが、一九九五年一月十七日の阪神・
淡路大震災で道場が閉鎖。二人の恩師、高田幸博監督
（五九）が九八年に現道場を再建した際、この詩を継
承し、印刷したものを道場の壁に掲示した。

道場の「魂」とも言える詩だが、小学生当時は気
も留めなかった。ただ、トップ選手となり、五輪まで
の重圧、さらに肩のケガやコロナ禍で不安が募る中、
心に響く一篇となった。「勝利は大変だ。だがもう一
息」。練習の度に心の中で唱え、歯を食いしばった。

高田監督は「まさか、そんなに大事に思っていてく
れたとは全然知らなかったですよ」とうれしそうに笑
う。兄妹での五輪二連覇という偉業へも「もう一息」。
心を支える言葉がある。

（デイリースポーツ柔道担当・藤川資野氏の記事と記
事の掲載写真を引用）

蛍の観賞会

村外会員 水谷 淳

新しき村は、村所有の水田と借地を合わせ二町歩余の水田で無農薬で稲作栽培をしていることから、二〇〇四年から蛍が飛ぶようになり、コロナ禍の前は六月に観賞会が開催されてきたとのことです。



蛍のひかり

今年はコロナ禍も減少したので、六月三日、四日と一〇日、一日の二回に分けて蛍の観賞会が開催されました。今回の開催は、新しい理事会体制となり、開催案内のパンフレット

(カラーの写真付)を作り近隣の児童館、図書館、学童保育所(四カ所)等に張り出したり、近隣に配布したり、ラインで紹介したとのことでした。

私は、新しき村の副理事長の千賀さんに誘われ、六月四日に参加しました。

田植えも終わり、稲の生育のために利用する水路(毛呂山町大字葛貫の新しき村と南台(毛呂山台)との境にある葛川沿い)が蛍の観賞会の会場となりました。ここに生息する蛍は「源氏氏たる」で、近年は蛍の復活を目指し、各地で繁殖の活動も見られるが、蛍の活動域は年々狭まるばかりで街燈の届かない静かな暗闇の浅い水辺を好み餌になる「カワニナ・巻貝」のいる場所が生育の条件となるということです。

来場者を迎えるために、会場までの夜道の安全な誘導のために行灯(あんどん)を手作りして道の中央に置く配慮がなされていました。行灯は四本の竹で、枠をつくり、障



夜道の安全を確保するための行灯

子紙で回りを張り、中にろうそくを置き火を灯したものでこの風景は夏の新しき村に新鮮な風情を加えました。天候は四日間のうち最終日は雨のため中止となりましたが、三日間で七八人の参加者があったとのこと。私が参加した四日は新しき村の親子で訪れた人も多く四八名の見物す

評議員就任のあいさつ



評議員 長島 光夫

この度、新しき村の評議員として選任されました長島光夫です。どうぞよろしくお願いいたします。

私が評議員を務めることとなった経緯は、昨年十二月、武者小路理事長、千賀理事（現副理事長）、加藤理事（現専務理事）が坂戸市を訪問されたことから始まります。訪問の内容は、「現在、新しき村を一般財団法人から公益財団法人へ移行するための認定申請を埼玉県に提出しているところであり、法人の更なる発展のため評議員の増員が必

る人で賑い、久しぶりに蛍が数多く舞うのをみて大変感動しました。

農業を使わない稲作をしていることで葛川のきれいな水が保たれ、村主催で毎年蛍観賞会が継続して開催されると、より多くの人が参加し楽しむことができると思いました。

要となっている。については、新しき村の約二分の一の土地がある坂戸市からも、評議員として推薦できる方を紹介していただけないか」といった旨の打診であり、市役所を定年退職し、毛呂山で農業をしていることから私が適任ではないかという話をいただき、思いがけないご縁から評議員を引き受けることとなりました。

新しき村を末永く維持・発展させていくためには、村の運営が適切かつ健全に行われていることが必要不可欠であり、そのためには、私たち評議員が持つチェック機能を十分に発揮していくことが重要であると考えています。

このような重責を担うことについてはいささか不安な面もありますが、関係者の皆様と協力し、新しき村がより安定的に発展していけるよう微力ながら取り組んでまいりますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

新しき村創立から

第二十四年（埼玉の東の村の開設三年目）

一九四二年（昭和十六年）

（財団法人新しき村発行の「新しき村五十年」から転載）



野井十（左）と川島伝吉

日向は杉山家族。

○開墾約二反。

○水田一反六畝を得

た。

○九月二十八日、第二

回収穫祭には、たくさ

んの兄弟姉妹が集つ

た。

（略）毎日、自転車

で東の村に通う道は楽

しいものになっている。殊に山を見るのは日課と云つ

ていい。近頃は朝は大抵霞んでいるが。（略）

三月、四月から五月、自分達の仕事は忙しかった。

時間のかかる油絵等は描いていられなかった。五月九

日に漸く陸稲を四反歩余り蒔き終えたが、その前には

里芋とか馬鈴薯とか去年よりずっと広く作った。未だ

薩摩芋の苗植えの仕事が残っている。去年は六月中頃

に苗を植え初めたがと思う。去年よりは約一月早く植

え初めている。広さも今年は約一反近く作っている。



新しき村の風景

『東の村』第三年。
陸稲四反で十俵。
反当二俵半という
やせ土地であるが、
川島一家（六人）と
野井一家（六人）は、
がっちり組んでが
んばった。

この年、十二月
八日、太平洋戦争
がはじまる。



新しき村をのぞむ

併し之も間も無く終る筈だ。小豆も相当に作ろうとしているが、畑が少く空地を見付けては種を下している。村の土質も去年よりはずっと呑み込めてきた。大根は柔な大きいのが作れそうに思っている。薩摩芋、里芋は美味なものが出来そうに思っている。今年は収量もずっと多くなるつもりだ。葱も相当にこの土質では出来るのではないかと思う。併し葱の方は未だ栽培の仕方が充分呑み込めずにいる。葱を作るには苗作りが大

切なのだが、苗作りは

三回しくじっている。

そう準備もなく、ほんの僅かやってみたが、相当に湿気が必要なことと、土質が軽い点を改良すれば苗も作れるようになると思ふ。

トマト、茄子、薩摩芋の苗作りを今年初めてやってみたが薩

摩芋の苗はものになり、その傍らに作ったトマトの苗もものになったが、フレームに作った方は萎縮病にかかって、トマトも茄子も駄目になった。胡瓜は野鼠が入ってかぢって駄目になった。今年やってみて失敗の原因は解ったので、来年は作れると思っている。(略) 六月二日

(野井十『東の村雑記』・昭和十六年八月号『馬鈴薯』)

昭和十六年三月二十三日 小雨

小雨が降っていた。村へゆくと満開の桜が、雨の中で散りかけていた。長瀬駅で待つと時間が来て、先生、中川、坂上夏美ともう一人初めての人だった。先生は雑誌について「だんだんのり気になる」と云っておられた。「群妙」という題も考えたとのことだったが、やはり先生のすきなものは「馬鈴薯」の方だとのことだった。

村へ着くと昼食にし、小雨もやんでいるので土地を見て廻った。五反七畝二十五歩のもの、更に田圃沿いの五畝二十五歩を見てもらいなどした。先生は地図をつくっておくといい、だんだん買いまとめてゆきたい

とも言うっておられた。奥さんが蘭に興味をもち初められたとのことで、採集したりした。花が咲いていた。木の根の間にかく抱かれて、古いすばらしい蘭があつて苦心してとったりした。

この日、先生は、納屋を少しよくつくる方がいいということ、控屋の雨戸のこと、畳をつくることも賛成して下さった。四時九分に帰ってゆかれるのを送った。

四月二十七日 晴

大勢だった。朝鮮人で、新しき村をつくりたいという二人も、一緒だった。先生、中川、江馬、坂上、女学生二人、もう一人知らぬ人、村上。(画家)

六月二十二日 晴

来会者は、東京から十四人ほど、それに川角の岡君、毛呂の上村君もあとからきた。

昼食がすむと、一時から作業ということになり、まづ梅の実をとることからはじめ、二升ほどとり終わると、一部は陸稲の除草、一部は納屋の地ならしにかかった。そのうち野井が馬鈴薯をほって、かおるにゆでさ

せたのをたべにかかった。汗をふき足をあらって、増田荘へあがった。それから演説会にまで発展したが、見廻すと飯山、野井、中川と珠子、利倉、阪上夏美、鈴木、須藤嬢、先生、江馬等の顔があつた。

七月二十七日 晴

雨がやんで、晴天になった。

座ぶとんをもち、松本君から送ってきた先生の字の額の拓本「飛瀑」千家さんの玉ねぎのエ、土肥徳太郎のエ、長与さんの富士山の幻影のエ、村上君の色紙など持って村へ行く、菓子も買った。

十一時半に、先生と一緒に来たのは中川、前田、飯山、坂上夏美、斎藤、外に松元という初めての人。

九月二十八日 曇

村へゆくと十一時、大勢の人がきていた。野井は大勢つれてさつまいも畑の方に行っていたが、栗ひろいしている者や先生の像の方あたりをさまよっているものもあつた。控家に畳が入っていた。

十一時半頃昼食、野井その他が十二時半に長瀬へつ

く先生らの一団を迎えに出た。

僕らは稲刈りを始めた。時間がなくなるかもしれないと思つたからだ。根津、鈴木繁男、江馬その他だった。若い女の人達も三四人いた。根津はいっ子という五歳位の子をつれてきていた。江馬も七歳位の女の子をつれてきていた。

僕は刈り方を始めて見せると、又手をつくりにかかった。増田荘の右側の檜へ四段つくった。

先生達の一行の来られたのを見ると、二十人位あるかと思われたが、実際は朝のと両方でそれ位だったのだろうと思う。先生と一緒の人達の中に、奥村博史氏もいた。一度顔を見せた先生が食事をすませて、二度目に見えると稲刈りをしばらく見て、次に土地を見に行こうと言われた。「皆行かないか」というわけ。「いつでも買えることになったのだ」と金のことを云つておられた。立木もいくらかある方がよいようなことだった。檜林へ入ると、二反歩位檜が切り倒されて皮をむかれてあつた。そこを見ながら横切つて一度道へ出、一番遠い方の境界の方へ見に行った。婦人雑誌の写真班の二人がそこで撮影した。

引き上げることになったのは、四時十分のガソリンカーへのる為、途中の時間をみて三時半頃だった。

十一月二十三日 晴

僕は朝七時から油上げ二枚やどびん、ヨーカン等を持って村へ行った。

先生達は九時五十八分、二十人近かつた。晴れて新しき村旗と日章旗とが、美しくひるがえつていた。

午前中、さつまいものほりあげ作業をした。

午後一寸して先生作の「開会の口上」で会が始められた。川島、野井、先生、須藤が演説し、江馬、城米、前田君も話した。

帰りにさつまいもを持って帰ってもらふことにした。五時十五分長瀬発で皆を見送った。

(川島伝吉の日記・宇野幸子筆写)

○五月 雑誌『馬鈴薯』を扶桑閣より創刊。

この年八冊、昭和十七年十二冊、昭和十八年十二冊、昭和十九年二冊、合計三十四冊で終刊。須藤紋一が印

『馬鈴薯』創刊号目次

発刊の辞 武者小路実篤

日日草 武者小路実篤

生と死 境久光

ピユウテイヤ凱勝歌 呉茂一訳

シャルル・デュ・ボス日記抄 武者小路実光訳

良寛の涅槃図に就て 武者小路実篤

◆新しき村欄

・境久光君について 川島伝吉

・村上頼一君について 野井十

・戦地だより 福田桂次郎、渡辺貫二、太田孝之助

・詩と句 千家元麿 ・詩 村上頼一

・習作 野井十 ・六号詩 永見七郎

◆創作

・夏語る 川島伝吉 ・自画像 悦田喜和雄

・出世 前田伍作 ・街に出て 城米彦造

・六号 千家元麿 ・村の生長 坂上真一郎

◆編輯後記 同人



『馬鈴薯』

刷、製本一切をひきうけてやってくれた。

○東京支部は、本郷仏教青年会館で、毎月、講演会

をひらいた。

(略)その頃雑誌「新しき村」は復刊していたが、一般の本屋には出さず、購読者は村の会員とその友達に限られていた。

そこへ木曜会にはめつたに顔を出したことのない会員の須藤が突然現われて、村の雑誌は僕が引受けると云い出した。そして三年間は絶体責任をもつと、先生や僕等の前で断言した。

これは後の話になるが、須藤は二年間以上約束を果した。

『馬鈴薯』が廃刊になったのは彼の都合によるものでなく、全く戦争のためだったことを明らかにしてきた。

『馬鈴薯』を始めて、三十四冊を出して、益々よき読者を得て喜んでいましたが、今度国策にそつて『文芸日本』と合体することになりました。『文芸日本』

では、僕達の要求は全部入れてくれると云つてくれているので、僕達も喜んでよき仲間が出来たと思つています。事實は今後の『文芸日本』を見て下さればわかります。『馬鈴薯』に厚意をもつてくれた人は『文芸日本』を見て下さればうれしく思います。僕達は相変らずの気持ちで原稿を書き、それを発表できることをよろこんでいます。『文芸日本』という川に、『馬鈴薯』という川が国策にそつて合流して新しい大きな川が出来るわけで、なつていいことにしたいと思います。くわしくは事實でお目にかけていと思つています。これが三十四冊目についた武者小路先生の終刊の辞であつた。

『馬鈴薯』の編集所は中川の家にあつた。毎月、中川、江馬、前田と東の村から川島、野井が集まり、五人が編集会議を開いた。川島が皆の原稿を丹念に読むのには感心したが、たまたま僕達が読んで余り気乗りしない若い人のものを盛んに推したり、僕達が面白い

と思つた古い人の原稿を悪評したことは、今でも語り草になつてゐる。

『馬鈴薯』は、従来の新しき村の機関誌としての使命の他に新しき村の文学を社会へ押出してゆこうといふのだから、皆が真剣になつたわけである。

城米君などはその筆頭で、毎月のように小説をかいた。しかも長いものが得意だつた。

江馬は『星の群』に手をつけ、第二号で早くも『鮒』という傑作を生んだ。今でも耕さんにあるうと、江馬君の『鮒』はよかつたという話が出る。こんどこれを書くために読み直して見たが、耕さんの言にまちがないと思つた。江馬は当時こういつた小品を百篇ぐらゐかいておきたいといつて張り切つてゐた。

その頃、江馬と僕は、ともに結婚して示し合せたやうに最初の子供が生れるか、生れた時期で、両方で自分の子供のことを競争のように書いたものである。江馬の子供のことが出て、自分の子供のことが出ていない号は、自分の子供に気の毒な気がした。江馬もそうだつたといつても嘘にはなるまい。

悦田君の長篇の『自画像』は、創刊号から出たもの

である。四国文学会から出た『新しき日』の作品目録によると、『自画像』は昭和16・5（長篇連載未完か？）となっているので、念のため調べて見ると、昭和十七年三月号に第七回が出たきりになっていることが分つた。江馬のかいたものにあと一回で完結すると悦田兄の手紙にかいてあったと、四月号と五月号の二度にわたって報告されている。最後の一回がのらず終刊したことはいかにも残念である。

永見は『青い枝』という長篇をかき、連載中に『銃後に子供あり』と改題した。これは立派に完結して、昭和十八年十一月に新泉社から刊行されてよく売れた。

『馬鈴薯』も二年目になると、思わぬ新人が現われた。その一番手は武者小路辰子さんだった。昭和十七年の二月号に『青い国で遊ぶ雲』という題の五行詩と『森の中で』という小説で、これは四月号から六月号まで四回にわたって連載された。

これについて当時先生のかかれたものがある。「辰子の詩を喜んで下さった人が多かったのを親として感謝している。今度は小説と自分ではいつているが、

続きものを出すことにした。満十三才四カ月の子供の空想をすらすらとかいたものだが、僕は面白くよんだので出してもいいものと思っている」

中川、江馬、僕も辰子さんの発想力の奔放さに驚いて、さすがに先生のお子さんだけあると噂した。

あれから二十年以上の月日がたった。その辰子さんが最近名著といわれた『源氏物語の女性像』を出版されたことは皆の知る通りである。

辰子さんと前後して登場した人に、直木孝次郎君がいる。彼は直木さんの次男で当時京大の学生だった。『秋風の夢』という創作を送ってきた。一高時代の思い出をかいたものであった。

筆も伸びて気持ちのよいものだった。その次に送ってきたものは『金の鼓』で、前作とはがらりと趣きが変わった歴史小説で、一人の武士がある僧のみちびきで僧の道に入り、大往生するという谷崎でもかきそうな小説でよくまとまっていた。

しばらく前、直木孝次郎君のかいた『持統天皇』という本をよんで感心し、文章に芸術的な感覚があつて小説をよむような面白さがあると思つた。

この本のはしがきに、「私事にわたるが、少年期の私に、日本近代史に関する興味をよびおこし、またいくたびか大和の古寺巡礼に私をいざなってくれた家兄由太郎にも、この機会に感謝したいと思う。そうして、私たち兄弟の成長を見守ってくれた母に、この一書を捧げることができるのは、何よりの喜びである」と記してあった。

孝次郎君は現在大阪市立大学の文学部教授である。

この辺で少し自分のことをかいて見ることにしたい。

僕も『馬鈴薯』にいくつかの短篇をかいている。僕には自分のかいたものを愛読する悪いくせがある。自分の文章には自分にか書けない自信があるが、どうもこの頃かいたものを読みかえすと、自分ながら余り好意がもてないのには困った。

ところがその僕にも、昭和十七年六月号に『章作』を発表した時は、皆から一斉にほめられた経験がある。自分では長男の誕生を事実即してありのままかいただけで、傑作をかくなどという野心はさらさらなかった。江馬が「前田君の『章作』は久しぶりの創作だ。受けとつ

た時、直ぐに読んで、見る見る感心して、その次逢った時いきなりほめちゃったもので、今また再校で読み返してみたが、やっぱりほめちゃったことに間違いなれと思つた」と編集後記で取上げたのを始め、利倉もほめたハガキをくれた。利倉は僕が小説をかくとよくハガキをくれた。それは子供のことをかいた時に限られていて、他の材料でかいたときはこちらが当てにしていなくてもくれなかつたが。

これをかいた月に、東の村へ行つたら帰り坂戸の駅で、二人の姉妹が手帳を出して、僕に署名を頼んだ。その時『章作』をよんで面白かつたといつてくれた。今その姉妹の名前をどうしても思い出せないが、多分宇野さん姉妹だつたように思う。愛読者から署名を求められたのは、武者小路先生を抜かすと『馬鈴薯』ではこの僕だけかも知れない。

雑誌もいよいよ第三巻目を迎えた。十八年一月号を『二宮尊徳号』として全頁を当てた。

尊徳号を出すことになつたのは、その前の年に岩波文庫で『二宮翁夜話』の新版が出た。その読後感を『馬鈴薯』に出したら、増田さんの眼にとまり、川島のと

ころへ佐々井信太郎の二宮尊徳研究、その他尊徳に關した本を沢山送つてこられた。その話を先生にすると先生も喜ばれて、『白樺』でロダン号を出したように『馬鈴薯』でも二宮尊徳号を出してはといわれたのが始りであつた。

この尊徳号で僕の忘れられぬことがある。先生にいわれて増田さんに手紙を出した。増田さんからは早速自分の筆で書いた原稿と佐々井さん始め、知人の上月、金子両氏の原稿に手紙をつけて送つて下さつた。

ところが、村の方では尊徳のことを知っているのは、先生と木村壯五さんの二人ぐらいで、書くことになつた、川島、野井、悦田、鈴木（一念）今野も武者小路先生の二宮尊徳について書かれたものを読んでいる程度だつた。これから本を読んだり勉強して原稿を書く始末で、なかなか原稿が揃わなかつた。

増田さんからは、自分の原稿の訂正や追加のことで、川島や僕のところへ、度々書留、速達、その上電報まで寄せられた。

何しろ増田さんは、尊徳の言葉は自分の文章よりも一字高くするくらいだから、元の原稿に文字を加えた

り、削つたり切張りするのは厄介だつた。すると手紙のはしに『八十の老人が始めて原稿をかくので面倒をかけます』と書かれたりして、増田さんが僕のつぶやきをきかれたように思い恐縮した。

ようやく『尊徳号』が出来て増田さんに送つたら、増田さんはそれを見て『長生きしたかいがあつた』といつてこられた時はうれしかつた。その増田さんがその年の七月に他界された報らせをきいて、僕たちはがっかりしてしまつた。

渡辺が戦地から帰つてきて『征育』というのをかき出したのは、昭和十八年の五月号からである、それが翌年の終刊号まで続いた。

『征育』というのは、彼の造語であるが、彼が戦地で得た魂の発展を記録したものである。生長力の強い一人の男の人間記録として江馬も愛読した。

その頃、渡辺と前後して太田、福田が帰還して、執筆を期待したが『馬鈴薯』が終刊してしまつた。

武者小路先生、千家さん、鈴木一念、武者小路実光さんの原稿は、創刊号から終刊号まで、殆ど一回も休載しなかつた。これ等については、改めて感謝をこめ



『文芸日本』の尾崎士郎



武者小路実篤の自宅

て書くつもりである。
る。

昭和十九年に入ると企業整備が始まり、出版会から呼び出しを受けた。『馬鈴薯』と『文芸日本』『文芸世紀』の三誌で二誌になれという命令である。僕等は困ったことになったとは思ったが、こちらから両方へ出かけて頼むことはしなかった。

すると『文芸日本』の尾崎士郎の使いの人が須藤のところへきて『文芸日本』との合併をすすめられ

た。一方『文芸世紀』の中川与一は自ら僕を訪ねてきて同じことを頼んだ。

結局、『馬鈴薯』は『文芸日本』と一緒になることになった。三鷹の先生のお宅で僕等が集っている時、尾崎士郎がお礼にきて、先生と二人でぼつりぼつり口調で話したのを、傍らで聞いていた。それが雑誌の話でなく、近衛さんについてだったような印象がある。新しい『文芸日本』の編集は、村側として僕が当ることになって、一回ぐらい先方の人と逢った程度の時、僕に召集が来た。後を誰に頼んで行ったのか思い出せない。

出征中に新潟の本屋で一度『文芸日本』に先生の詩がのっついて、僕はそこを読んだだけで後はまるで興味がなかった。僕たちの『馬鈴薯』が終刊になったことを、つくづく感じたのはその時であった。

(前田伍作『馬鈴薯の思い出』)

昭和四十二年九月号『この道』

旧武者小路実篤邸

「仙川の家」

武者小路実篤は「水のあるところに住みたい」という子どもの頃からの願いをかなえ、昭和三〇（一九五五）年、七〇歳の時に調布市の仙川の地に居を構えた。最寄り駅にちなみ「仙川の家」と呼び、九〇歳で亡くなるまで晩年の二〇年を安子夫人とふたりで過ごした。午前中に原稿を執筆し、午後は書画の制作や多くの来客に対応する毎日であったという。自伝小説「一人の男」や、野菜や花などをモチーフとした数多くの書画がこの家で生み出された。

実篤没後、邸宅、遺品などが、ご遺族から調布市に寄贈され、邸宅は実篤公園として昭和五三（一九七八）年に開園した。公園は国分寺崖線の斜面上に広がり、公道を挟んで上下二つの区画に分けられている。旧武者小路実篤邸（以下「旧実篤邸」という。）は、上の区画に、実篤生前の姿をほぼ残して佇んでいる。「戦後和風住宅の好例」として、

平成三〇（二〇一八）年一月に国の登録有形文化財に登録された。

旧実篤邸概要

設計者…山口芳春

建築年…昭和三〇（一九五五）年

構造…木造平屋建地下室付、金属板葺

建築面積…一九五㎡

「旧武者小路実篤邸主屋 文豪・武者小路実篤が晩年を過ごした自邸。武蔵野段丘崖線上の敷地中央に建つ木造平屋建、切妻造鉄板葺で、山側の北面に玄関、谷側の南面に居室を設ける。外観はモルタル大壁で重厚に仕上げつつ、内部は新興数寄屋風で瀟洒にまとめる。戦後和風住宅の好例」

（文化庁…文化遺産オンラインより）

旧実篤邸公開日

内部公開 土曜、日曜、祝日 午前十一時～午後三時

邸内に入つての見学が可能（雨天中止）

※平日はテラスからガラス窓越しに邸内の一部（応接室・



旧実篤邸見取り図
 (実篤記念館ホームページより)
 実篤記念館ホームページでは各部屋をパ
 ノラマ写真で見ることができる。

正面外観(玄関)

実篤公園入口から国分寺崖線を切り通した急な坂道を下ると、まもなく旧実篤邸が現れる。

仕事部屋)を見学できる。

※実篤公園の開園時間は午前九時～午後五時。入園無料

※月曜(祝日の場合は直後の平日)及び年末年始(一二

月二十九日～一月三日)休園



正面外観(玄関)



南面外観



ロビー

南面外観

各部屋は南に面し、春の新緑、夏の濃緑、秋の紅葉、冬の木立からの柔らかな木漏れ日が差し込み、季節を感じながら過ごすごすることができる。

ロビー

玄関から入ってすぐのロビーは北に面しているが、屋根から自然光が入るよう工夫されている。生前は実篤が愛蔵した西洋や日本の近代美術作品、実篤自身の油彩画が掛けられるなど、小さな展示コーナーになっていた。

仕事部屋

実篤は、小さな経机で原稿を書き、大きな座り机で画や書を作した。生前の机や畳は画のモチーフとなる陶器や人形、野菜や花などがいっぱい、足の踏み場もないような状態であった。



仕事部屋

応接室

仙川の家には、編集者、画商、新しき村の会員のほか、時には実篤のファンなど、多くの人が毎日のように訪れていた。部屋の棚や壁には愛蔵品や美術書が所狭しと並べてあった。また油絵を描いたのもこの部屋であった。



応接室



客室



居室・サンルーム

客室

客室は親しい来客を通し、広い床の間には愛蔵した東洋の書画を入れた箱が多く並べられていた。また、お茶をたしなむ安子夫人のために、水屋もつくられている。

居室・サンルーム

当時としてはまだ珍しいサンルームもあり、「明るい家」という実篤の希望がかなえられている。

利用案内

・開館時間／午前九時～午後五時

(閲覧室は午前10時～午後四時)

・入場料／大人200円 小・中学生100円

※展示替え期間は半額

※調布市内在住六五歳以上は無料

※身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・愛の手帳
をお持ちの方、及び付添人は無料

※調布市在住・在学の小・中学生は、毎週土曜日に無料
パスが利用可

※「東京・ミュージアム ぐるっとバス」利用可

・休館日／月曜日(祝日の場合は直後の平日)、

一二月二十九日～一月三日

※展示室と閲覧室は別途休室日あり

・交通／京王線つじヶ丘駅または仙川駅下車 徒歩10分

小田急線成城学園前駅より「調布駅」または「つ

つじヶ丘駅南口」行きバス稲荷前下車 徒歩五分

・駐車場／乗用車五台

調布市武者小路実篤記念館

〒182-0003

東京都調布市若葉町1-18-30

電話・03-3333-2610・6448

ホームページ：<https://www.mushakoji.org>



夏休み企画

「おしえて！ 武者小路実篤」

『友情』『お目出たき人』など、現代でも武者小路実篤が書いた小説は読書感想文の課題図書になったり、テレビなどのメディアに取り上げられたりします。そんな実篤は一体どんな活動をしたのでしょうか？本や絵をかいた人。そして新しき村を作った人。さまざまな活動をした実篤の九〇年にわたる生涯を紹介します。

本展覧会では、実篤の「人柄」がわかるエピソードにスポットを当てます。たくさんの業績を残し、偉くて遠い存在のように感じてしまう実篤も、一人の人間。子どものころは苦手な科目があったり、青春時代に夢中になった作家がいたり、友人と喧嘩したこともあります。意外とお茶目な面も。本展で実篤がもつ身近な存在に感じられるかもしれません。

■会期

七月八日（土）～八月二七日（日）
午前九時～午後五時

*月曜（祝日の場合は直後の平日） 休館

■入場料

大人二〇〇円 小・中学生一〇〇円

■展示解説

解説：勝見 知世（当館学芸員）

日時：八月一八日（金）午後一時三〇分から四五分間
程度

会場：実篤記念館（展示室）

*入場料のみでどなたでも参加できます。参加希望の方は当日、会場に直接お集まりください。

■関連行事

夏休み自由研究サポート（中学生以下とその保護者を対象）

●八月二七日（日）まで。

毎週月・木曜日を除く午前一〇時～午後四時

展示風景



■同時開催
調布市郷土博物館コラボ展示「実篤公園は縄文遺跡だった？」
旧実篤邸がある実篤公園から出土した石器や土器片を展示しています。

- ・たんけん地図で実篤記念館のひみつを探せ！
- ・実篤ジグソーに挑戦！
- 八月八日・二五日・二二日（火）午後一時～四時
- ・実篤マンホールで拓本を体験しよう！
- ※詳細は実篤記念館ホームページでご確認ください。

展示作品

◎「友情」武者小路実篤



大正九（一九二〇）年
四月 以文社

実篤の代表作品。初版本を展示しています。装幀は岸田劉生が手がけました。

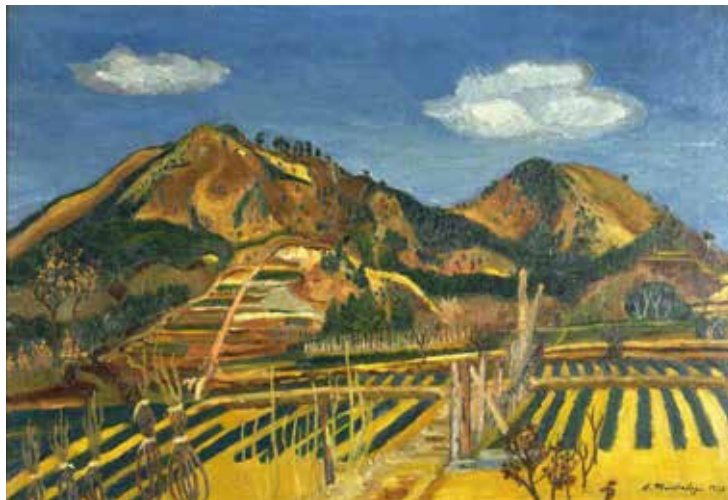
◎「愛と死」原稿 武者小路実篤



発表：『日本評論』昭和一四（一九三九）年七月号

当時、日中戦争に徴兵された若者が戦死した話をよく聞き、愛する者を失う人に同情して書いた作品。小説の展開は三年前の欧米旅行の経験がモデルになっています。

◎「伊豆風景」 武者小路実篤（次ページ）



「伊豆風景」武者小路実篤

1935年 キャンバス・油彩。実篤50歳の作品。

秋季展

「新しき村創設一〇五年 ―理想社会実践の歩み―

武者小路実篤記念館では、新しき村創設七十周年以降、十年ごとの周年に当たる年はもとより、数年ごとに新しき村に関する展示を開催してきました。実篤は、文学、美術、新しき村を仕事の三本柱として挙げており、実篤の業績を顕彰するうえで、新しき村は欠かせない一角を占めます。

新しき村は、自己を生かし、誰もが人間らしく生活できる理想社会の実現をめざして、大正七（一九一八）年に武者小路実篤が創設した共同体です。

実篤が、雑誌『白樺』や新聞などで自身の考えを表明すると、若者を中心に多くの賛同者が出て、実践の場を求めて宮崎県に土地を購入し、突き動かされるように運動が進んでいきます。

新しき村では、生活するために必要な、農作業などに充てる義務労働の時間と、自己を生かすため、人間らしく生きるための、さまざまな活動に充てる個人の自由時間が区別されます。労働基準法のある今でこそ、一日の労働時間

を定めるといふのは当たり前には感じませんが、当時としては、大変画期的な考え方でした。

新しき村実践の場は宮崎県に始まり、昭和一四（一九三九）年以降は主力を埼玉県に移します。高齢化などの課題を抱えつつも、双方の地で今も続く一〇五年の軌跡をたどります。

■会期

九月二日（土）～一〇月九日（月）

午前九時～午後五時

*月曜（祝日の場合は直後の平日） 休館

■入場料

大人二〇〇円 小・中学生一〇〇円

■展示解説

解説…石井めぐみ（当館学芸員）

日時…九月一〇日（日）、九月二九日（金）

いずれも午後一時三〇分から四五分間程度

会場…実篤記念館（展示室）

*入場料のみでどなたでも参加できます。参加希望の方

は当日、会場に直接お集まりください。

■関連行事

文学講座「新しき村会員の作品から一〇五年の歴史をひもとく」

普段読む機会の少ない会員著作を通じて、新しき村の実像を読み解きます。実篤の視点とは少し違った世界が見えてくるかもしれません。

講師…瀧田浩（二松学舎大学教授）

日時…一〇月一日（日）

午後一時三〇分～三時

会場…実篤記念館

定員…一〇名

参加費…一五〇円*入場料別途

申込み…往復はがきの往信面に（一）講座名、（二）応募

募者全員（一枚につき二名まで）の氏名・ふりがな、（三）年齢（任意）、（四）郵便番号、（五）

住所、（六）電話番号、返信面にご自身の宛先

を明記の上、九月一七日（日）必着で実篤記念

館（〒一八二一〇〇〇三 調布市若葉町一八

一三〇）までお送りください。

秋季展出品予定作品



日向新しき村 創設期の人々 大正8(1919)年

母家の前で。後列中ほど、麦わら帽子をかぶるのが実篤。実篤記念館本館棟の特徴的な三角屋根は、この母家をモデルにしている。



機関誌『新しき村』

大正7(1918)年7月に創刊されて以来、雑誌名の変更や一時休刊した時期もあるが、現在まで発行が続いている。



労働カード

大正15(1926)年、義務労働の達成度に「無事」「完全」「完全以上」の三段階をもうけ、これを果たした会員に村の名で祝福と感謝を送る制度が作られ、数年間実行された。

仕事の喜び

武者小路 実篤

元気になれば仕事がしたくなるなり。

仕事をしたくって仕方がないと

ついまた元気になるなり

内に力がわいてくるなり

その力で我は仕事をするなり。

ああ 我はいつも仕事をしたいなり

さればつい元気になるなり。

朝起きると

原稿がかきたくなるなり

たのまれてる以上に

何かかきたくなるなり

原稿に疲れて

かかれるものの線が

ますます生きてくるなり。

内の力

外の力

これがすれすれに

相共に生きるなり

我生きるなり

彼生きるなり

共に生きるなり

喜びその内にあるなり。

一心こめて

散歩すると

今度はまた画がかきたくなるなり

何かしていると嬉しくなり

何もしないと

何かおちつかぬなり。

一生自分は仕事するなり

これがどんなものになるか

我は知らねども

ただ一心に

仕事すると

我喜びなり。

力内に満ち

益々元気になるなり

益々真剣になるなり

見ていると

仕事するなり

一心こめて

文章をかくなり

一心こめて

線をひくなり

一心こめて

字をかくなり

それがしたくって

毎日勇んで起きるなり。

一心こめて

仕事が出来る喜び。

かくて僕はまたいろいろのものを賛嘆する事を覚えたのである。画をかく事を知って、いろいろのものの美しさを知り、賛嘆する事を覚えるのである。

(株式会社福武書店 発行)

「武者小路実篤 画文集6 詩と人生」

「この道より」

武者小路 実篤



実篤人生詩集「この道より」(1993年4月30日小学館発行)の表紙

皆が咲く世界

君も咲いた
僕も咲いた
あなたも咲き
私も咲いた
美しく。

一人の犠牲者もない
皆が皆
生きる世界
私はそう言う世界を望んでいるのだ
皆が美しく咲く世界。

独立と協力
それが美しく
調和して
皆が咲く
美しさ。



きょうこそ一歩

毎日、毎日
きょうこそ一歩進んでみようと
思えども
なかなか進めず
されど我はがっかりせず
なお進んでやろうと思う。
毎日、毎日
進んでやまないものは
いつか頂上に達するであろう。

向山昇兄を悼む

中村 隆夫

樋山兄から連絡を頂いた。五月十六日に向山兄が亡くなった・・・と。あまりに突然のことで驚いた。二年ほど前に寺島兄から兄の電話番号を聞いて電話した。懐かしく話が弾んだ。奥さんの美佐子さんもお元気そうだった。今年七月に青森に旅行して突然訪問し

驚かせようと目論んでいたところだった。思えば兄が離村した後、青森の自宅に訪問したことがあった。私はまだ在村中だったが突然の訪問に大変な歓待をして頂いた。そのお礼もまだしないでした。七月に訪問しお礼をしたいと考えていたが、それが叶わなくなった。せめてお線香だけでも考えている。

兄は私と同時期に入村した。二か月ぐらい私が早

かった。兄は私より一歳年上で、青森弁でとつとつと話す物静かな人だった。村では丁度公会堂の建設をしている時だった。兄の家業は左官業だったので、公会堂の風呂のタイル貼りを受け持つことになった。その助手を私が仰せつかった。さすがに兄は本職で見事な仕事ぶりだった。私は見ているだけ、タイルを貼った後に汚れたタイルの拭き掃除ぐらいが私の仕事だった。しかしそれが役に立った。日向の村に滞在した時、房子さんから風呂のタイルが剥がれているので直せるかと聞かれ、向山兄の見よう見まねで修理して、房子さんに喜んでもらえたのである。

さて、その話はさておいて、向山兄は野球も卓球もバレーボールも水泳もしなかったが、長距離を走るのが得意だった。黒山鎌北湖駅伝の練習で一緒に走ったが、フォームがきれいで速くてとても付いていけないかった。元日に川越迄マラソンをしたときは、私より一時間も早くゴールした。

それと何よりも偉いと思ったのは、昭和四十年代半ばの真冬の旧食堂の火事の時だ。私は食堂に続く部屋に住んでいた。「この道会」という会を有志で開いて

いたが、会が終わっていつもより遅く就寝し、眠りが深い頃だった。飼っていた猫がやたらに啼いて、何か暑苦しくて目が覚めた。すると窓が真っ赤になって揺れていた。外に出ると粉殻置き場の粉が炭の熾火のように真っ赤になって、柱と私の部屋の壁を炎が舐めていた。私は慌てふためいて消火器を探しに食堂に行ったが暗くて見つからず、村内放送で皆を呼ぼうと思っただが、その時ふと朝日久子姉が出産を控えていたことが頭をよぎった。村内放送で久子姉を驚かせてはいけないと思ってしまったのだ。私は何か事件の時は樋口兄が頼りになると誰かが言っていたのを思い出し、樋口家まで走って樋口兄を呼んだ。「火事だー増田荘が燃えちゃうよー」と叫んだ。すぐに樋口兄寺島兄河内兄その他の人たちも消火器を持って駆けつけてくれた。だが、消化器ではとても消せない火勢になっていた。水道の水は凍っていて使えなかった。牛屋の湯を汲んできた人がいたような気がする。その時、河内兄は車庫の車を火から離れた。成程と思った。そして向山兄は食堂と増田荘を繋いでいる木材をカケヤで壊していたのである。増田荘を延焼から守るためだ。炎が

もう背中を焦がすほどになっているのである。私はその時何よりも自分を責めた。なぜ初期消火ができなかったのか、みじめに下着のまま立ち尽くす自分に比べて、向山兄の姿は本当に神々しく思えた。

この火事のことには書いて良いか悩んだが村の歴史の一ページである。今になればもう許してもらえるとと思う。この火事のことではもつと書きたいことがあるが、今回は向山兄の追悼が目的である。余計なことを書きすぎたかもしれないが許してほしい。

私が向山兄に惹かれたのは彼が不幸の星を背負っていながら、境遇を恨むでもなく、自棄にもならず、謙虚に純粋に、先生を愛し、新しき村を愛し、前向きに生きていたということだ。青森弁で静かに口数少なく話す。その声はもう聴けない。御冥福を祈ります。私こそちらに行ったらまた酒を飲みながら語り合ひましょう。

令和5年3月26日理事会決議・同4月2日評議員会承認

令和5年度 事業計画

(令和5年5月1日～令和6年4月30日)

1. 令和5年度の事業計画

令和5年4月現在埼玉県から公益認定が下りていないが、公益認定されることを前提として令和5年度事業計画を立てる。

(1) 土地・施設維持管理環境及び自然整備事業

村の土地施設の維持管理・環境及び自然整備は、これまでの状況を維持しつつさらに改善を加える。そのためには、村内会員・村内長期滞在者・ボランティアの力を中心にこの事業を行うこととし、必要があるときは専門家に依頼して行う。

(2) 美術館・生活館運営事業

昨年度はコロナ禍で入館者が少なかったが、今年度は公益法人化できることを記念して以下のことを行う。

① ハガキ・色紙等を増やす

② 調布の武者小路実篤記念館と連携をとり、美術館運営について指導してもらう。

(3) 機関誌の発行

機関誌「新しき村」は、平成30年12月号まで毎月発行していた。平成31年1月から令和2年10月まで年4回となり、その後令和3年1月号から年6回となった。年12回発行していたときは1冊20頁～25頁位、年4回発行のときは1回平均約60頁位、年6回発行のときは1回平均約42頁である。

本年1月号(72頁)と3月号(82頁)は、オールカラー化して頁数を増やして発行した。

本年1月・3月号は、カラー化して写真が多く見やすくなり、実篤や新しき村を紹介する内容が多く掲載され当法人の機関誌として新しいスタートを切ったと言える。「新しき村」を72頁

～82頁くらいの頁数で発行を継続するためには、掲載原稿を集め編集する時間と経費の関係から年6回発行することは困難である。

そこで、本年5月以降「新しき村」の発行を年4回（1月・4月・7月・10月）とする。年4回発行としたとしても年間合計頁数は280頁以上となり、以前の年12回又は年6回発行していたときよりも頁数は多くなる。

(4) 年間行事

コロナ禍のため令和4年度は労働祭、創立記念祭のいずれも開催できなかったが、今年度は近隣の方に参加してもらって創立記念祭を盛大に行いたい。そのために必要な予算を計上する。また、村で自生しているホタルの育成に予算を取り、ホタル観賞の会を行う。

2. 公益認定後の課題・構想

当法人が公益認定を受けた後の第1年目として、本年度は以下のことに取り組む。

(1) 村の環境整備を進める。

- ① 村の施設の多くは昭和時代の建物であり、特に村を訪問する人が利用するトイレの改修が必要である。そこで、公堂のトイレを浄化槽設置の水洗トイレとする。
- ② 八角井戸の補修をする。
- ③ 空家となり廃屋となっている建物・使用していない建物を美観上解体することが望ましいと思われる建物から順次解体する。解体する建物は、村内会員の意見を聞いたうえ理事会で決定し、予算の範囲内で行う。

(2) 懸賞論文の募集

村が公益法人となったとしても村を長期にわたって存続させるためには新しい事業を立ち上げる必要がある。

公益認定取得を機に、武者小路実篤の開村の理念を活かしながら、村をどのように再生するかについての具体的な計画案を懸賞

論文として、有識者や専門家のみならず、広く一般の人々（村内会員・村外会員も含む）から募集することとし、この論文を懸賞論文審査委員依頼専門家及び村内会員・村外会員の意見を含めて検討し最も優秀な案を採用し村の再生につなげる。

しかし、村の土地は市街化調整区域にあるため、土地の上に建物を建築し、土地を開発するとき諸々の制限があり容易ではない。また、村の土地には下水道本管が敷設されておらず、大型開発をするためには、インフラ整備に相当額の費用がかかる。

このような難問があるので、懸賞論文の応募者は、前記の通り新しき村の精神を尊重したうえ、村全体を総合的に開発するための提案をする必要があるので、都市開発や農業、教育、高齢者問題、観光事業等について知識が必要であることからグループによる応募も可とする。

また事業計画を具体化するための収支計画等を検証する必要があり、相当の時間を要する。

村にとって、このような重要なことについて提案を受ける懸賞論文の応募に対しては、相当額の賞金が必要であると考え、賞金の金額を最優秀である武者小路実篤大賞1名300万円、優秀賞1名100万円、佳作若干名30万円とする。

(3) クラウドファンディングによる寄付金の募集

上記(1)(2)の事業を進めるには資金が必要であるので、当法人が公益法人になった際にインターネットを通じて新しき村と新しき村の精神を全国の人に発信して、クラウドファンディングの方式を使って寄付金を集める。

クラウドファンディングで寄付金を集めた多くの団体の例を参考に寄付金目標金額を2,000万円とする。なおクラウドファンディングで寄付金を集めるには、依頼する業者に支払う手数料や寄付者に対するお礼品送付等で寄付金の約20%の雑費がかかる。

以上

令和5年3月26日理事会決裁・同4月2日評議員会承認
2023年度収支予算書（令和5年5月1日から令和6年4月30日まで）

（単位：円）

科 目	公益目的事業会計	収益事業等会計	法人会計	合 計
	公1	収1		
I 一般正味財産増減の部				
1. 経常増減の部				
(1) 経常収益				
受取会費	500,000		500,000	1,000,000
事業収益	2,820,000			2,820,000
農業	2,500,000			
機関誌販売収入	130,000			
美術館入館料	190,000			
太陽光発電売上		1,000,000		1,000,000
新村堂家賃収入		1,799,760		1,799,760
太陽光二の丘土地賃貸収入		748,000		748,000
受取寄付金	62,000,000		1,000,000	63,000,000
雑収益	10,000			10,000
経常収益計	65,330,000	3,547,760	1,500,000	70,377,760
(2) 経常費用				
事業費	65,361,332	2,373,305		67,734,637
給料手当	3,900,000	200,000		4,100,000
役員報酬	1,620,000			1,620,000
旅費交通費	1,000,000	5,000		1,005,000
通信運搬費	200,702	20,070		220,772
減価償却費	1,100,000	950,000		2,050,000
消耗什器備品費	1,000,000	91,000		1,091,000
消耗品費	500,000	10,000		510,000
修繕費	30,000,000			30,000,000
燃料費	200,000			200,000
光熱水道費	2,000,000	200,000		2,200,000
借地料	309,368	297,235		606,603
保険料	300,000	300,000		600,000
租税公課	1,300,702	300,000		1,600,702
支払負担金	20,000			20,000
印刷費	600,000			600,000
会議費	60,000			60,000
謝礼（ボランティア等）	1,000,000			1,000,000
農業関係費	500,000			500,000
環境整備費	1,000,000			1,000,000
ビル管理費	250,560			250,560
懸賞論文関係費	6,000,000			6,000,000
美鷹名言石碑	8,000,000			8,000,000
クラウドファンディング経費	4,000,000			4,000,000
雑費	500,000			500,000
管理費			1,451,133	1,451,133
給料手当			500,000	500,000
役員報酬			180,000	180,000
旅費交通費			10,000	10,000
通信運搬費			10,000	10,000
減価償却費			21,133	21,133
交際接待費			20,000	20,000
会議費			100,000	100,000
支払報酬			550,000	550,000
雑費			60,000	60,000
経常費用計	65,361,332	2,373,305	1,451,133	69,185,770

会員だより

■ 新会員

辻本由美子 大阪府八尾市
 緒方 賢 東京都日野市
 沓掛 計夫 埼玉県上尾市
 深水 秀臣 埼玉県熊谷市
 橋爪 穰 和歌山県和歌山市
 吉村絵美留 東京都港区
 水谷 淳 埼玉県日高市
 下村 一郎

■ 会費受領(数字は西暦二〇〇年〇月)

根津 ハル 23 1 | 23 2 寺島 洋 23 1 | 24 8
 山口 さん 23 3 | 24 2 小川 豊房 23 3 | 24 2
 水沢 澄江 23 4 | 24 3 守屋 孝一 25 5 | 27 4
 小出 輝雄 23 5 | 24 4 小出千代子 23 5 | 24 4
 川辺 賢一 23 5 | 24 4 沓掛 計夫 23 5 | 24 4
 田中 英樹 23 5 | 24 4 布川 武司 23 5 | 24 4

■ 「新しき村」購読料

松尾 欣治 23 5 | 24 4 稲葉江利加 23 5 | 24 4
 下村 一郎 23 5 | 23 10 緒方 賢 23 7 | 24 6
 樋口 正浩 23 7 | 24 6 佐藤 敬 23 7 | 24 6
 小沢ゆみ子 23 7 | 24 6 深水 秀臣 23 7 | 24 6
 顧 偉良 23 7 | 24 6 内田 勤子 23 7 | 24 6
 橋爪 穰 23 7 | 24 6 吉村絵美留 23 7 | 24 6
 水谷 淳 23 7 | 24 6 岩橋 俊哉 23 7 | 24 6
 辻本由美子 23 7 | 26 7 伊藤 優子 23 9 | 24 8
 早野 勲 23 11 | 24 10 永井 牧子 24 1 | 25 12

二名 12.1

■ 寄付

川野今朝治 40
 倉敷ミチ子 200
 株式会社あさひテクノメンテ 100

(単位:千円) / 2023年3月1日 ~ 2023年6月30日



【茶】五月十七日に一

番茶刈取りを行った。

よい天気恵まれ沢山の
 お手伝いをいただいた。
 渡辺好隆、原田
 タキ、早野勲、小島

真樹、小島由江、矢幡末廣、矢幡多美子、勝木啓子、勝木さんご主人、保坂さん、松島さん、田中さん、稲垣喜弘さん、樋口和子さん、小田切正雄、倉敷幸児、和田東市で行った。今回は今までお手いして下さった後藤秀三さん、阿久津光子さんに代って松島、保坂、田中、勝木さんに加わっていた。茶葉の目方が少なかった。葉が小ぶりなのがその理由とのこと。井戸端の枝垂れ桜の所や村外会員の家の茶畑、元床屋の茶樹はよく伸びていたが全体的に今いち収量がのびなかった。収量は一八八・五kg(生葉)製茶三八kgでした。茶葉の葉っぱが小さいときは寒さが強かったのが原因しているとなべ園のご主人の話である。見た目と予想のずれ、中々甘くないのを痛感した。私の

手の不行き届きで色々心配いただいた。特に小田切兄、森山兄、山田修一兄とそのお友達、川辺賢一兄、山田政一兄、小島由江姉、小島真樹兄等助けていただいた。年一回の新しき村、茶の収穫、参加の面々、川島桜の木陰でお茶タイムおしゃべりを楽しみました。

五月十七日の茶収穫後は八月上旬に整枝（刈落）を予定している。茶畑の通路には雑多な雑草が繁茂し梅雨時にはひどい。森山兄には刈払いを真剣にやっていた聞いています。雑草との戦いが続きます。

（和田東市）

【竹林】三月号に間伐のことを書いた。何度もふれたように、竹林の間伐は初冬に行なう、遅くとも立春には終える―というのが竹栽培の常識だ。そして春、桜が咲き終えると筍が始めるといのが自然界の流れだ。

今年の孟宗竹の筍を見つけたのは三月三十日（日）だった。そして収穫が終わったのは四月の二十七日（木）だっ

た。地球の温暖化のせいか年々時期が早くなっているが、始めはさておき、終るのが四月中というのは、二十年やってきて初めてのことだった。

ちなみに二十年前筍の収穫に取り組み始めたときの認識は、四月の五日頃から五月十五日頃までの四十日間が孟宗の筍の時期、というものだった。今年には始めがや、早く、出方も多いという感じだったが、いい調子で出続けて、例年だとピークを迎える（その気になって掘れば一日に百本の収穫も可能）四月の最後の日曜日に終りを宣言したという、これ迄にない結果となった。

収穫量も五五〇本という最低記録だった。これはむしろ全国的なもので、後日、日本竹ファンクラブの年次総会でも話題になった。

話は横道にそれるが、今年四月二十三日に行われた町議選に立候補（三月号にチラッと書いた「計画」のこと）し、打ち込んだので、ひと苦労したが、右に書いたように極端な不作だったの

で、逆に助かった。このかん田中英樹兄がタイミングよく応援に入ってくれ、とても有難かった。周知のごとく落選。

真竹の収穫は五月二十六日（土）に始まった。孟宗竹のこれ迄にない不作を経験して、さて真竹はどうだろうと注目した。恐らく真竹も相当わるいだろうというのが正直な見方だった。結果は平年並で「や、不作」だった。七二〇本。

ところで今年はおうっかりしていて、フィールドの草刈をやっていないから、収穫と並行してやるような有様だった。当然のことながら宣伝も不十分。売れゆきが悪かったが、余った時に、日高の県道沿いの食堂の元六さんが買いにきてくれ助かった。また、一・三人真竹の筍が大好きというお客さんがいて、ひんぱんに買いに来てくれ、救われた。

（小島真樹）

【田圃】六月下旬の、数回の強めの夕立ちのおかげで、水路の水量は必要な程

度にあり、鎌北湖の水に頼らなくとも、代かき、田植えをする事が出来た。

最後の田植えを七月一日にしてからしばらくの間は田んぼの水を保っていたが、まとまった雨が降らず、猛暑が続くと、水路の水もすつかり減ってしまい、後半の田んぼが数日間干上がった。どうも今年は空梅雨のようだ。こういう時の為の北鎌湖である。毎年田んぼ農家は水の使用料を支払う。村はもう二十年以上、入間第一用水の総代を勤めている。十二日、役場に電話して、鎌北湖の水門を開けて水を流してもらう様お願いした。すぐには対応してもらえなかったようだが、本日十五日の理事会の後、田んぼの見回りをしたら、ある系にはふんだんに水が来ていたが、別の系にはまるで来っていない状態だった。細かく言うと水路は村の中に四系統ある。それぞれを、良い塩梅にする為には、ちよつと出て行かなければならない。まず、大谷木の鎌北直売所のすぐ近くにある水路の分岐点で調整をし、次に近所のOさん宅

の敷地内の分岐点でまた調整し、最後に八高線の踏切近くの分岐点を確認した。その後、理事会の片付けを済ませた倉敷さんの部屋へ行き、鴻ノ巣の堰を作り直したいからちよつと力を貸してくれない？と声を掛け、二人で、水流の圧で傾いてしまい、水嵩がやや減ってしまった堰を一度外して作り直す作業をした。新たに杭を四本、掛矢でしっかりと打ち込み、鉄の枠を置き、さらに二枚のコンパネを当てがい、ブルーシートを被せて、それを固定する為土のうを両脇に積み、中にもいくつか押さえに並べる。片付けて撤収する頃には水嵩も増し、どんどん田んぼに入り出した。やれやれである。田んぼに水を引く為に、こんなに大きな堰を作っているとところがあるのかな？と思う。田んぼの水がなくなつて、すぐに役場に電話をしなかったのは、数日間、局地的な雷雨の予報が出ていたからだ。実際、夕方を過ぎると連日、東から北の方角には、高く大きく入道雲が湧き上がり、稲光が間断なく見えて

いた。しかし、この辺りには降らなかつた。場所によってはゲリラ雷雨や突風による被害が出てしまったようだった。雨の降り方はもう明らかに変わってきている。堰作りを終えて田んぼ小屋に戻ると午後三時を過ぎていた。倉敷さんが、今日は朝ごはんを食べなかつたからお腹すきました、と言った。もちろんお昼もまだである。僕は、プチ断食だね、と言った。僕ら、食事が不規則になる事が多い。田植えや稲刈りの日は、昼など気にせず終わるまで続けてしまう。しかし、食事をおろそかにしている訳ではない。村の炊事がなくなつてもう一年と四ヵ月、だいたい毎日料理をしていくなかで、食と身体の方はそれまでよりも考えるようになってきたと思う。この日は、秋田県が記録的大雨に見舞われている様子がテレビから流れていた。

田んぼは昨年同様の作付け、一町七反強。銘柄はミルククイーン、イセヒカリ、おまちかね、新太郎兵衛もち。ジャガイモは種いも二十五kg分、男

しやく、メイクイン、キタアカリ。三月五日植え付け、七月に入り収穫。良い出来だった。

今年の梅はそこそこの成り。梅ジュース、梅サワー、梅干しを少しずつ作った。七月に入って梅ジュース販売開始。

七月一日の最後の田植え以降、前半の田んぼの草とりに終われている。最中に見られる水生植物、水生昆虫など、いつか稲垣さんがまとめてくれるかも知れませんが。昨年六月一日から来られるようになって稲垣さん、一年を過ぎましたね、無事に。これからどうぞよろしく願います。

他にお手伝いいただいている方々は、松島昇さん、林弥生子さん、太田一夫さん、丸橋ユキさんです。おつかれさまです。ありがとうございます。

(小田切正雄)

LINE 公式アカウント 「新しき村 友の会」参加者 募集!

農作物などの販売案内

ボランティアなどの募集

村を訪れる方への近況配信

イベント開催案内

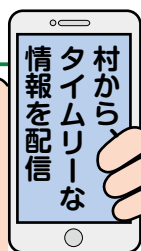
(例)



4月6日
より
竹の子
販売開始
です



村の竹林育ち 1本ずつ掘り
上げてます



LINE 公式アカウント「新しき村 友の会」を始めました。

ご登録^(※)いただきますと、こちらからの配信の受信、担当者とのメッセージのやりとりができるようになります。

担当：倉敷、稲垣

※〔登録の仕方〕

スマホのカメラで右のQRコードを読みとる → 画面の下方に緑色の帯が表示されるので、タップ。なお、LINEのID検索なら「@015kyusk」。 (初めてLINEをお使いになる方は、市販のスマホの入門書などをご参照ください。)

LINE 公式アカウント
友だち募集中
@015kyusk



LINEの「友だち追加」からID検索するかQRコードをスキャンしてください

令和五年一月号から、全ページフルカラーとし、印刷・デザイン・内容ともに大きく変更しました。今号は、公益認定が六月中に取得出来たときは、公益認定取得特集号として発行する予定でしたが、太陽光パネルを農地法の許可を得ないで設置したことからこれを撤去する必要があります、この手続きに時間を要し公益認定取得は本年九月以降になると思われるので、本号は特集号としないで、発行することになりました。

新しき村の実情を知っていただくことが第一と考え今号も新しき村のフォトギャラリーのページを多く取りました。この写真の大部分は村外会員の稲垣喜弘さんが撮影したものを掲載しております。太陽光パネルの撤去ということは、村にとって大変つらいことですが、村の歴史の上で記録として残す必要があると思ひ特に稲垣さんに克明に撮影していただくことをお願いし、そのデータを使用しています。

また、本年三月号から調布市武者小路実篤記念館にお願いして、同記念館から投稿してもらいました。本号では、旧武者小路実篤邸「仙川の家」の紹介と夏休み企画・秋季展一二頁分を投稿してもらいました。

(千賀 修一)

原稿募集

会員からの投稿を募集しますので、会員になつたきっかけとか新しき村の精神を日常生活にどのような生かしているか実篤の名言等についてお書きくださると良いと思います。

会員以外の方から新しき村に関することや実篤の作品・名言等についての投稿お待ちします。

原稿は、五〇〇字～二〇〇〇字・原稿用紙又はワードで作成。ワード作成は横書き・書式自由です。原稿用紙で作成の方は、新しき村まで郵送してください。

ワードで原稿作成の方は、メール (sanga@t-teo.com) で送付して下さるようお願い申し上げます。

「新しき村」編集責任者 千賀修一

新しき村の会員 募集

● 村内会員

新しき村に入村して、新しき村で生活する会員です。入会の要領・その他については、村内会員規則で定めています。ホームページで見てください。

● 村外会員

以下の三種類とし、会費を添えて申し込めば誰でも村外会員となることができます。

- 一 個人会員 新しき村の精神に賛成して入会を希望する個人
- 二 賛助会員 団体又は個人で、当法人の事業活動を賛助する者。
- 三 維持会員 団体又は個人で、当法人の事業活動を援助する者。

会員は、会員種別に応じて毎年左記の会費を納入しなければならない。

- 一 個人会員(A)六千円 (B)一万円
- 二 賛助会員一口 五万円
- 三 維持会員一口 五〇万円

会員は、次の特典を享受することができます。

- 一 当法人が発行する雑誌「新しき村」の配布を無料で受ける。また、個人会員(B)・賛助会員・維持会員に対して実篤カレンダーを贈呈する。
- 二 当法人が主催する行事に招待を受ける。

入会を希望される方は、ホームページで入会申込書をダウンロードして新しき村までFAX(〇四九一二九五―五三九八)又は郵送して下さるようお願いいたします。

会費・誌代・寄付 送金振込先

■郵便振替口座

00110-6-182967
一般財団法人 新しき村

■埼玉りそな銀行越生毛呂山支店

普通預金口座 0754078
一般財団法人 新しき村

E-mail:info@atarashiki-mura.or.jp

URL : <http://www.atarashiki-mura.or.jp/>

新しき村の地図



村の近くの県道にバスが通っています。次の番号に電話すると詳しい時刻を教えてください。JR 八高線を利用する人には便利です。042-973-1161 国際興業バス飯能営業所

新しき村 HP

新しき村

検索



新しき村の精神



一、全世界の人間が天命を全うし各個人の内にすむ自我を完全に生長させる事を理想とする。

一、その為に、自己を生かす為に他人の自我を害してはいけない。

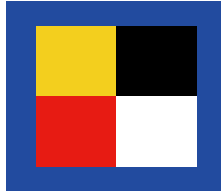
一、その為に自己を正しく生かすようにする。自分の快樂、幸福、自由の為に他人の天命と正しき要求を害してはいけない。

一、全世界の人間が我等と同一の精神を持ち、同一の生活方法をとる事で、全世界の人間が同じく義務を果せ、自由を樂しみ正しく生きられ、天命（個性もふくむ）を全うする道を歩くように心がける。

一、かくの如き生活をしようとするもの、かくの如き生活の可能を信じ、全世界の人が實行する事を祈るもの、又は切に望むもの、それは新しき村の会員である、我等の兄弟姉妹である。

一、されば我等は国と国との争い、階級と階級との争いをせずに、正しき生活にすべての人が入る事で、入ろうとする事で、それ等の人が本当に協力する事で、我等の欲する世界が来ることを信じ、又その為に骨折るものである。

一、されば我等は国と国との争い、階級と階級との争いをせずに、正しき生活にすべての人が入る事で、入ろうとする事で、それ等の人が本当に協力する事で、我等の欲する世界が来ることを信じ、又その為に骨折るものである。



新しき村 第77巻 第3号

令和5年7月21日発行

発行者 / 武者小路知行

編集責任者 / 千賀修一

デザイン編集 / 山口千穂・写真データ協力 / 稲垣喜弘

発行所 / 一般財団法人 新しき村

〒350-0445 埼玉県入間郡毛呂山町葛貫423番地1

TEL・FAX 049(295)5398

印刷 / 東京カラー印刷

■本誌は会員には無料送付、会員外の直接購読料は1冊300円です。